

FLORA KANAGAWA

Nov. 15. 2013 No.77

神奈川県植物誌調査会ニュース第 77 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



図 1. イトハネガヤ *Nassella tenuissima* (Trin.) Barkworth.

A: 全形, B: 小穂 (苞穎から小花が離れたところ), C: 小花 (護穎), B, C ともにスケールは 1mm.

イネ科の新帰化植物 *Nassella tenuissima*
(Trin.) Barkworth イトハネガヤ (新称)
(勝山輝男)

6月1日の植物誌勉強会は5月3日に引き続きイ

ネ科植物をテーマに行った。その際に植物誌調査会藤沢グループの皆さんが、見慣れないイネ科植物を持って来られた。藤沢市川名の市街地にある梅林の隣接地に群生していたものという。全体が細く密

に叢生し、護穎の先は細長い芒になり、見た感じはナギナタガヤに似ているが、小穂は1小花からなり、護穎は苞穎よりも著しく小さくナギナタガヤとは明らかに異なるものであった。

北米のイネ科植物から調べ始めたところ、北米植物誌 (M. E. Barkworth, 2007) により、北アメリカのテキサス～ニューメキシコおよびメキシコ北部原産の *Nassella tenuissima* (Trin.) Barkworth (= *Stipa tenuissima* Trin.) と判明した。日本産のものではハネガヤ *Stipa pekinensis* Hance に近縁なので、その草姿から和名はイトハネガヤと新称した。原産地では岩の多い斜面、草原、松林などに生えるという。

その後、収蔵庫の未整理標本の束を整理していたところ、偶然、私が同定した本種の標本が出てきた。まったく記憶にないが、ラベルを見ると、2001年に藤沢市江の島の土産物店の植え込みで採集されたものであった。花序が2本しかない貧弱な標本であることと、採集場所が土産物店の植え込みということから、特に報告もせず忘れてしまったようだ。

北米植物誌 (M. E. Barkworth, 2007) によると、本種は園芸植物として栽培されるが、容易に周辺の荒地に逃げ出すという記述がある。日本ではこれまでに帰化の報告はないようであるが、ネットで検索すると、グラス・スティパまたはエンジェルヘアーの名で販売されており、切り花やドライフラワーに利用されているようだ。

今回、イトハネガヤが採集された藤沢市川名での繁茂の様子を聞くと、大量に種子が蒔かれたように思われる。果樹園草生栽培のナギナタガヤを思い出してしまった。果樹園などにナギナタガヤの種子を大量に蒔いて密生させ、雑草の防除を行うもので、ナギナタガヤは自然倒伏して刈取りの必要がなく、草刈り作業の手間を省き、除草剤散布を減らす良い方法として奨励されている。当然ではあるが、大量種子散布を続ければ、ナギナタガヤは周辺に逸出してゆく。その影響については十分には検討されていないようだ。外来種がさまざまな問題を引き起こしていることを考え、種子を大量に蒔くような導入方法は慎重に行うべきものと思う。今回のイトハネガヤ *Nassella tenuissima* がどのような経緯で繁茂したのかは不明であるが、今後の動向には注視しておきたい。

Nassella tenuissima (Trin.) Barkworth in *Taxon* 39(4): 612 (1990); *Stipa tenuissima* Trin. in *Mem. Acad. Imp. Sci. Saint-Petersbourg*, Ser. 6, *Sci. Math., Seconde Pt. Sci. Nat.*, 4, 2(1): 36 (1836).

多年草。根茎は発達せず、密に叢生する。茎は高さ20～50cm、幅約0.5mm、節の直下には圧毛が生える。葉は糸状で内巻する。円錐花序は長さ8

～15cm、幅1～3cm、最下部はしばしば鞘に包まれ、枝は直立し、長さ2～5cm。苞穎は同形または第1苞穎が少し長く、膜質で1脈、紫色を帯び、先はしだいに芒になり、芒も含めて長さ5～10mm、幅0.5～1mm。小花は1個、護穎は長楕円形で長さ約2mm、幅約0.5mm、強く内側に巻いて内穎を抱き、基部には長さ約0.5mmの毛叢があり、上端は冠状になり棘状の毛が列生し、その間から長さ4～8cmの屈曲する芒が伸びる。

標本：藤沢市川名 寺井京子 2013.5.28 KPM-NA0212305; 藤沢市江の島 中山博子・埜村恵美子・木山喜美子 2001.7.11 KPM-NA0212306.

引用文献

Barkworth M. E., 2007. *Nassella* (Trin.) E.Desv. in *Flora of North America Editorial Committee ed. Flora of North America, North Mexico Vol. 24.*, pp. 170-177. Oxford Univ. Press, New York.

日本新産？の外来種アレチアミガサソウ（仮称）

(秋山幸也)

昨年（2012年）の夏頃、横浜市在住の上原 健さんから、旭区の追分・矢指市民の森付近で見慣れない植物が生育している、との連絡を電子メールでいただいた。添付されていた写真を確認したところ、まるで見たことのない植物で、一見するとイラクサ科カクワ科のように見えた。その線で帰化植物関連の文献を探したものの行き当たらず、何人かの方にも写真を見ていただいたが、やはり分からなかった。

その後、現地を見に行こうと思っていた矢先に「草刈りで刈り払われてしまった」との連絡があり、持ち越しとなっていた。今年になって再び上原さんから「今年も育っています」と連絡があり、標本も送っていただいた。しかし、やはり正体がわからない。そこで「今度こそ草刈りの前に」と上原さんに現場を案内していただくことになった。

生育地は保土ヶ谷バイパス下川井インター近くの追分・矢指市民の森の一角と、中原街道の路傍の一部の2ヶ所で確認できた。写真や標本から想像はしていたものの、その植物は高さ20～30センチほどのあまり特徴の無い草本であった。現物を見ると、イラクサ科というよりクワ科やエノキグサに近い印象を受けた（図1, 2）。標本用に1株と、生品で検討するために土を付けたままの1株を採集した。

その後、相模原植物調査会の野外調査会の帰り、藤井良造さんと宮崎卓さんに、相模原市立博物館で



図1. アレチアミガサソウ（仮称）の雌花序と葉（旭区 2013.10.3 秋山幸也 撮影）。



図2. アレチアミガサソウ（仮称）の雄花序（旭区 2013.10.3 秋山幸也 撮影）。

鉢植えにしてあったその株を見ていただいたところ、トウダイグサ科ではないか、との結論に至った。さらに藤井さんが、インターネット上 (http://blogs.yahoo.co.jp/kochoo_noyume/33155086.html など) で見つけた中米原産の *Acalypha setosa* A Rich (トウダイグサ科エノキグサ属) ではないかと連絡をくださった。写真を見るとほぼ間違いなく、英名を Cuban copperleaf といい、園芸品として出回っているキャットテールに近いという。

文献による、さらにしっかりとした裏付けが必要であるが、まずは速報としてここに報告することとした。身近な文献やインターネット上で調べた限り、まだ国内で報告がなく、日本新産の外来種である可能性が高い。そこで、和名について発見者の上原さんと相談し、外来であることと路傍で生育可能な性質、そして同属のエノキグサの別名であるアミガサソウに因み、アレチアミガサソウと仮称したい。ちなみに、同属にはキダチアミガサとヒメアミガサソウという外来種が報

告されている（清水ほか, 2001; 清水, 2003）。

本種については、詳細な外部形態の検討や、国内外の分布情報の収集が必要であり、これらを整理したうえで、改めてしかるべき場で報告したいと考えている。

標本：横浜市旭区矢指町（標高約 60m）秋山幸也 2013.10.3 SCM48124.

引用文献

清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七, 2001. 日本帰化植物写真図鑑. 554pp. 全国農村教育協会. 東京

清水建美 編, 2003. 日本の帰化植物. 337pp.+160pls. 平凡社. 東京

道志川溪谷のイワカラマツ

(久江信雄)

イワカラマツ *Thalictrum sekimotoanum* Honda (synonym: *Thalictrum minus* L. var. *sekimotoanum* (Honda) Kitam.) は、アキカラマツ *Thalictrum minus* L. var. *hypoleucum* (Siebold & Zucc.) Miq. に似ているが、花期は5～7月とアキカラマツより約2ヶ月早く、溪谷や山地岩場にごく稀に生え、全草に腺毛を密生して粘り、独特の臭気を有する。青森、秋田、宮城、栃木、長野、香川、神奈川にのみ生育が確認されている日本固有の植物である（矢原, 2003; 加藤・海老原, 2011 ほか）。

神奈川県におけるイワカラマツは、1989年に中津溪谷石小屋で勝山（愛甲郡愛川町中津溪谷石小屋輝男輝男 1989.6.4 KPM-NA1100119）により発見され、さらに、1990年には旧津久井町青野原付近の道志川溪谷で第2の産地（津久井郡津久井町青野原 勝山輝男 1990.6.23 KPM-NA1102835）が発見された（長谷川, 1991）。『丹沢大山自然環境総合調査報告書』（勝山ほか, 1997）では、アキカラマツ類似のものにイワカラマツの可能性が示唆され、『神奈川県植物誌 2001』でイワカラマツが神奈川県新産として報告された（城川, 2001）。中津溪谷のイワカラマツは宮ヶ瀬ダムの建設により水没し失われたため、道志川溪谷のイワカラマツのみ現存することになっていたが、その後の調査はされていなかった。

そこで、2013年5月下旬から7月中旬にかけて5回にわたり、相模原市緑区青野原付近から緑区青根の両国橋までの道志川溪谷におけるイワカラマツの分布の現状調査を行った。対岸からほとんどのイワカラマツを見つけることができたが、10×40 双眼鏡は大いに役に立った。その間、6月中旬には、花期のイワカラマツを比較するため、基準産地である栃木県の岩船山を訪れた。

相模原市緑区青野原付近の道志川溪谷のイワカラマツは勝山（1990）の発見時に50株未満と推定されていたが（勝山ほか, 2006）, 5月28日と6月10日の調査により右岸の緑区青野原側に約75株, 左岸の牧野側の岩場に約150株のイワカラマツを認めた。イワカラマツは, 水面から数十cm～数m上の岩場にみられ, 岩上の割れ目から斜上あるいは直立, または垂壁から懸垂するものまでであった。5月28日には小さい蕾が上がり始め（図1）, 6月10日には開花が始まっていた（図2）。さらに7月10日に, 青野原より5km上流の緑区青根の荒井・平丸地区対岸の緑区牧野で開花中の約30株のイワカラマツを発見したが, これは新産地と思われる。

道志川溪谷のイワカラマツは発見から20年以上経過するが, その後の株数の増加を認め, 生育地はほぼ良好な環境に保たれていると考えられた。

道志川溪谷のイワカラマツは, 基準産地である岩船山のそれと比較して花期は一致していたが, 腺毛の密生度について明確な違いを認めた。すなわち, 基準産地のイワカラマツは, 茎, 小葉, 花梗, 萼など全草に腺毛が密生し, 肉眼でも容易に確認できるほど, 腺毛が多いが, 道志川溪谷のイワカラマツは, 茎の下部で微細な腺毛がやや密生し, 茎の中部から上部にかけて腺毛は減少し, 小葉, 花梗, 萼などには僅かしかなく, ルーベを使用しない限り確認は困難であった。このように, 道志川溪谷のイワカラマツは基準産地のイワカラマツに較べて腺毛が非常に少なく, 今後, 他の産地のイワカラマツとも比較検討する必要がある。

最後に, 毎回調査に同行していただき, ほとんど膝上か腰上までの渡渉や時には水泳をして生育地へアプローチしてくれた亀崎 誠氏と, 道志川溪谷と基準産地のイワカラマツの腺毛の比較作業に加わっ



図1. イワカラマツ（相模原市緑区牧野 2013年5月28日 久江信雄撮影）。



図2. イワカラマツ（相模原市緑区牧野 2013年6月10日 久江信雄撮影）。

ていただいた菅沼広美さんにお礼申し上げます。

標本：相模原市緑区牧野 久江信雄・亀崎 誠
2013.5.28. KPM-NA0212126; 相模原市緑区牧野
久江信雄・亀崎誠 2013.7.10. KPM-NA0212318.

引用文献

- 長谷川義人, 1991. 県北津久井の植物2（承前）. *Flora Kanagawa*, (31): 340.
- 勝山輝男・高橋秀男・城川四郎・秋山守・田中徳久, 1997. 丹沢山地の種子植物・シダ植物. 丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp.331-382. 神奈川県環境部, 横浜.
- 矢原徹一（監修）, 2003. ヤマケイ情報館レッドデータプランツ, p.633. 山と溪谷社, 東京.
- 加藤雅啓・海老原淳（編）, 2011. 日本の固有植物, p.52. 東海大学出版会, 秦野.
- 城川四郎, 2001. キンボウゲ科 17. カラマツソウ属. 神奈川県植物誌調査会（編）, 神奈川県植物誌 2001, pp.705-707. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 維管束植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久（編）, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp.37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

南足柄市のシヤクジョウソウ

（大野好弘）

南足柄市の溪流沿いの斜面にて, シヤクジョウソウ *Monotropa hypopithys* L. を確認した。シヤクジョウソウ

ウは神奈川県では絶滅危惧 I A 類 (CR) に選定され (勝山ほか, 2006), 『神奈川県植物誌 2001』 (村上, 2001) においては, 稀であるが県内各地で採集されることが述べられている。

神奈川県立生命の星・地球博物館の大西学芸員によれば, 同館収蔵のシャクジョウソウ開花期の標本では, 県内の標本 9 点は, いずれも 7 月に採集されたものであるのに対し, 県外の標本 11 点のうち 7 点は, 8 月下旬に採集されているが, いずれも富士山や八ヶ岳など高標高地で採集されたものとのことである。今回確認したシャクジョウソウは開花時期が 8 月中旬と, 確認した県内産標本より遅く, 標高も約 360 m と決して高標高地といえる場所ではない。開花時期の遅いシャクジョウソウとして, 今後さらなる研究を進めたい。

標本: 南足柄市矢倉沢 大野好弘 2013.4.15 KPM-NA0201719 (前年の果実殻); 南足柄市矢倉沢 大野好弘 2013.8.20 KPM-NA0212476 (開花個体)

引用文献

村上 司郎, 2001. イチヤクソウ科. 神奈川県植物誌調査会 (編), 神奈川県植物誌 2001, pp.1091-1094. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原。

勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 維管束植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 (編), 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp.37-130. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原。



図 1. シャクジョウソウ (南足柄市矢倉沢 2013 年 8 月 20 日 大野好弘 撮影)。

スズサイコについて

(辻 和男)

スズサイコ *Vincetoxicum pycnostelma* Kitag. について, いくつか気づいたことがあり, 以下に報告する。

1. 花は「早朝開く」は誤り

スズサイコは珍しい多年草植物で, あまり見る機会が

ない。その開花時間については、『日本の野生植物Ⅲ』 (村田, 1991) では, 「花は早朝に開き, 日が当たると閉じる性質がある。」、『野に咲く花』 (門田, 2013) では, 「花は早朝に開き, 日が当たると閉じる」, 『神奈川県植物誌 2001』 (福留, 2001) では, 「花冠は早朝に開き, 午前中に閉じる。」、『横浜の植物』 (金子, 2003) では, 「朝開花し, 日中はしぼむ」と記述されており, 「スズサイコの花は早朝開く」と信じ込んでいた。

今回, 横浜市都筑区北山田の斜面草地で, スズサイコが十数株程度自生しているとの情報を得て, 観察したところ, 実際は, 「夕方 5 時頃から開き出し, 花冠裂片を次第に平開し, 夜の間, 臭気を出して咲き, 翌朝 8 時ごろにはほぼ閉じる」ことが分かったので報告する (図 1, 2)。なお, 花期は 6 月下旬から 8 月下旬頃までと意外に長い。



図 1. スズサイコ (横浜市都筑区北山田 2013 年 6 月 28 日 辻 和男 撮影)。



図 2. ほぼ満開状態の花. 17 時 58 分頃 (横浜市都筑区北山田 2013 年 6 月 28 日 辻 和男 撮影)。

2. 花は夜、開くため、臭気を出して虫を呼ぶ

次の神奈川県植物誌のための証拠標本として、株を採取し、夜に花を開かせるため、花瓶に入れて自宅の暗室に置いておいたところ、夜、見事に花は満開になったが、独特の臭い臭気が閉め切っていた部屋中に充満していたのには閉口した。やはり夜に花を開くので、色ではなく、この臭気で虫を呼ぶものと思われる。どのような虫がポリネーターとして来るのかは、今後、継続観察しないと本当のところは分からないが、今回は、大きい蚊のようなガガンボ類が閉じた花に捕まっているのが観察できた。

3. 花は一日花ではなく、数日花と思われる

閉じた花冠で虫を閉じ込めている花を見つけ、継続観察したところ、翌早朝、虫の足の一部を残して、花が開いているのが観察できた。このことから、一つの花の寿命は、同じように夜咲く花のカラスウリなどのように一日花で終わるのではなく、少なくとも2～数日間、開閉を繰り返す花であることが分かった。

4. 結実する確率は低い

観察した場所によるのかもしれないが、ガガイモ等と同じように、結実する確率は低く、ほとんど実をつけないように思われる。実際観察したところでは、ひとつの株に小さな花が多数咲くが、完全に実がないものや、1株に1～3個程度しかないものばかりであった。

果実はガガイモの仲間と同じような狭披針形で、若い頃は緑色で、次第に赤紫色に熟し、その後、割れて白い毛のついた種子を飛ばすものと思われる。10月上旬現在では、赤紫色の長さ7～8cmほどの果実になっていたが、まだ裂開していない。今後、継続観察する予定だが、毎年の草刈りで果実がなくなる惧れもあり、注意して見守りたい。

5. 根はやや中太のヒゲ状根が多数

直立する茎の太さは細いが、地下根は茎に比べて、やや中太のヒゲ状の根が多数あることに驚いた。標本を採集して詳細に観察した成果であり、標本の重要性を初めて実感させられた。

標本：横浜市都筑区北山田 辻 和男 2013.7.15
YCB434640 ; KPM-NA0220182.

引用文献

村田 源, 1981. ガガイモ科. 佐竹義輔ほか編, 日本の野生植物Ⅲ. pp.39-45. 平凡社, 東京.

門田裕一 (監修), 2013. 野に咲く花. 増補改訂し新版. 664pp. 山と溪谷社, 東京.

福留正明, 2001. ガガイモ科. 神奈川県植物誌調査会編, 神奈川県植物誌 2001. pp.1137-1144. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

金子紀子, 2003. ガガイモ科. 横浜植物会編, 横浜

多摩丘陵にベニバナギンリョウソウがあった

(中島 稔)

今年(2013年)の7月1日、東京都多摩市の公園でキノコを探して遊歩道を少し外れて歩いていると、クズギの根元に赤いものが見えた。そばに寄ってみると、花が終わったギンリョウソウの果実が、10本ほど密集して固まりとなって頭を出していた。何と、うっすら赤い色の果実であった。周りを探すと、10本ほどの集団が3ヶ所あり、うち2つは赤い果実の集団であった。果柄はほとんど地中に埋まり、果実の集団が地上に出ていた。しかし、その時は写真だけ撮って帰宅した。

帰宅後、調べてみると赤い果実のギンリョウソウは、ベニバナギンリョウソウの和名があり、*Monotropastrum humile* (D. Don.) H. Hara form. *roseum* Honda が相当するようだ。ギンリョウソウの品種となっている。九州の霧島山系の固有種のようなものである。そうであると、今回、多摩丘陵で見つかったことは、超隔離分布と言えるのではないか。果実の色は花の時期より薄くなるとのことなので、花はもつとききれいなピンク色であったと想像される。

2013年7月11日、何本かを採集し、生命の星・地球博物館へ収めた。この多摩市の公園、東京と神奈川にまたがる多摩丘陵の一角であり、川崎市麻生区とは至近で隣接している場所である。今後、神奈川県内からも発見される可能性は十分あると考えられ、県外の記録であるが、特に報告した。

「菌従属栄養植物」は気難しく、翌年必ず出てくれるとは限らないが、来年は是非ピンクの花を見て、ま



図1. ベニバナギンリョウソウ (多摩市豊ヶ丘 2013年7月1日 中島 稔撮影).

た報告したいと思っている。

標本：多摩市豊ヶ丘 中島 稔 2013.7.11. KPM-NA0199732.

西丹沢でのシカの影響

(三樹和博)

8月のはじめ、久しぶりに丹沢山地の山梨との県境に近いエリアを歩いてみた。下界は猛暑のさなかであったが、さすがに1,000mをこえる高原にわたってくる風は立ち去りがたいほどの涼風であった。しかし、三国峠から鉄砲木ノ頭にかけての林床にあるスズダケの群落はもうかなりシカの過度の採食を受け続けているとみえて、緑の部分が少なくなり、場所によっては枯れ残った稈（茎）が残るのみというところもあった（図1）。どのくらいの数のシカによるものか、またどのくらいの期間食べ続けられたかによって、スズダケ群落の呈する状態は違ってくるだろうが、三国峠付近に多いミヤマクマザサと違って、このスズダケは新筍や枝先を食べられてしまうと、地下茎からの再生が苦手なため、一気に枯死に至ることがある。

ほんのたまにしか訪れなくなってしまったので余計そう感じるのかもしれないが、この丹沢裏側の山梨県境一帯でも、シカの影響が増加していることを痛感させられるような現場によく出会う。スズダケはその進行の程度を知る代表的な指標植物であり、シカによる影響があるレベルを超えた植生中では、枯れ果てた稈が、居並ぶ塔婆のように見えてしまう。そして数年するとその枯死稈さえも消え、がらんと「なにもない」林床だけが広がることになる。もう国内の山地の中標高域では、そんな現実ばかりらしい。



図1. スズダケの枯れ残った稈（相模原市緑区三国峠から鉄砲木ノ頭 2013年8月8日 三樹和博撮影）。

2013年度前半の植物誌勉強会から

(勝山輝男)

5月3日「イネ科植物その1」、カラスムギを使ってイネ科植物の小穂の構造を学んだ後、博物館周辺を歩いてサンプルのイネ科植物を採り、実習実験室に持ち帰った後、実体顕微鏡を使って小穂の観察を行いました。当日、博物館周辺で採取できたものは、カモジグサ、アオカモジグサ、ネズミムギ、イヌムギ（閉鎖花型と開放花型）、オニウシノケグサ、ナギナタガヤ、スズメノカタビラ、ミゾイチゴツナギ、オオスズメノカタビラ、ナガハグサ、ヒエガエリ、ヌカボ、コバンソウ、シナダレスズメガヤ、チガヤなどでした。

6月1日「イネ科植物その2」、カラスムギの小穂の構造を復習し、前回みたイヌムギの開花型とヤクナガイヌムギの違いを標本で比較しました。その後、前回同様に博物館周辺を一回りし、サンプルのイネ科植物を採集して実習実験室に持ち帰り、実体顕微鏡を使って小穂の観察を行いました。季節が進行し、スズメノチャヒキ、ムギクサ、クサヨシ、コヌカグサ、ヒエガエリ、オオアワガエリ、ギョウギシバが観察できました。最後に、藤沢グループが持って来られたイトハネガヤ *Nassella tenuissima* (Trin.) Barkworth (本紙915-916頁参照)の小穂を観察しました。

7月13日「セリ科植物」、標本を使い、ツボクサとカキドオシ（シソ科）の葉の比較、チドメグサ属の4種（チドメグサ、ヒメチドメグサ、オオチドメ、ノチドメ）の見分け方、ウマノミツバ、ヤブニンジン、ヤブジラミとオヤブジラミの比較、カノツメソウとヒカゲミツバの比較、シシウド属の7種（ハナビゼリ、シシウド、ハマウド、シラネセンキュウ、ノダケ、イワニンジン、アシタバ）の区別、ヤマゼリ、ミヤマニンジンとシラネセンキュウの区別、イブキボウフウとカワラボウフウの区別を観察しました。

8月24日「トウダイグサ科ニシキソウ属とバラ科キンミズヒキ属」、標本を使って観察しました。まずはニシキソウ属（トウダイグサ科）のオオニシキソウ、シマニシキソウ、コニシキソウ、ニシキソウ、ハイニシキソウ、アレチニシキソウ、コバノニシキソウ、イリオモテニシキソウについて区別点を観察しました。その後、キンミズヒキ属（バラ科）の4種、キンミズヒキ、ヒメキンミズヒキ、チョウセンキンミズヒキ、ハコネキンミズヒキの違いを標本で確認しました。ハコネキンミズヒキは『神植誌2001』ではチョウセンキンミズヒキに含まれていたもので、Flora Kanagawa No.68で支倉さんが箱根仙石原の“チョウセンキンミズヒキ”はオオキンミズヒキ *Agrimonia noguchii* Seriz. ではないかと報告し、翌No.69でオオキンミズヒキを記載された愛

目次

勝山輝男：イネ科の新帰化植物 <i>Nassella tenuissima</i> (Trin.) Barkworth イトハネガヤ (新称)	915
秋山幸也：日本新産?の外来種アレチアミガサソウ (仮称)	916
久江信雄：道志川渓谷のイワカラマツ	917
大野好弘：南足柄市のシャクジョウソウ	918
辻 和男：スズサイコについて	919
中島 稔・松谷優香：多摩丘陵にベニバナギンリョウソウがあった	920
三樹和博：丹沢でのシカ食害	921
勝山輝男：2013 年度前半の植物誌勉強会から	921
編集後記	922
調査会のホームページを作り直しました!	922
11 月以降の勉強会の日程	922
総会のお知らせ	922

知教育大学の芹沢先生がオオキンミズヒキとも少し異なる点があるので、「ハコネキンミズヒキ」の和名を与え、まだ未記載ですが、亜種の階級で区別した方が良さそうであると解説されたものです。

9月16日「マメ科ハギ属」、Flora Kanagawa の予告では水田雑草を予定していましたが、サンプルや標本の都合でマメ科ハギ属に変更しました。当日は台風18号の影響で交通機関が止まり、参加者5名で実施しました。標本を使って、マルバハギとヤマハギの花序と萼裂片の観察、マルバハギとカワチハギの花序の毛の違い、ツクシハギの葉の下面に生える微細な圧毛の観察、ミヤギノハギの萼裂片の観察、ニシキハギの葉の上面の圧毛の観察などを行い、ハギ属の区別点を整理しました。その他、ネコハギ、マキエハギ、メドハギ、シベリアメドハギ(『神植誌2001』ではカラメドハギ)、オクシモハギ(県内未記録の帰化植物)の標本を検討しました。

10月14日「アカザ科」、当初はイグサ科を予定していましたが、講師の都合でアカザ科に変更しました。アカザ属の胞果を観察した後、シロザとコアカザの違いについて、葉形と胞果について観察しました。シロザとコアカザの胞果の違いは『神植誌2001』では取り上げていませんが、シロザの胞果表面は平滑で、コアカザの胞果表面には蜂の巣状の模様があります。続いて、マルバアカザやカワラアカザの花序軸には円柱状の毛があるのに対して、シロザ系のホソバアカザの花序軸には円柱状の毛は見られず、ふけ状の毛があることを、実体顕微鏡で観察しました。また、シロザの近縁なものでシロザモドキ *Chenomodium strictum* Roth が帰化していることなどを紹介しました。ハマアカザ属では果実が2枚の苞に包まれていること、ホソバハマアカザ、ホコガタアカザ、ハマアカザの違いを標本で確認しました。

編集後記

前号発行後、調査のための腕章も準備しました。ブロック事務局に運用をお任せしていますが、他の件も含め、何かご要望があれば、お申し越し下さい。

(田中徳久)

調査会のホームページを作り直しました!

Flora Kanagawaのバックナンバーの記事(創刊号~2011年度・会員向けの情報をのぞく)がインターネットから閲覧できるようになりました。アドレスは、『神奈川県植物誌調査会』(<http://flora-kanagawa2.sakura.ne.jp/>)です。

11 月以降の勉強会の日程

前号でお知らせしたメーリングリストではお伝えしていますが、11月以降の勉強会は、11月23日(土曜)、12月15日(日曜日)、1月25日(土曜日)、2月22日(土曜日)に実施予定です。

※時間はこれまでと変更し、13時30分から16時頃までを予定しています。

総会のお知らせ

今回の総会は、2014年4月6日(日)、生命の星・地球博物館講義室で13時30分~16時00分の開催予定です。講演・話題提供などは検討中ですが、予定を入れていただけますようお願いいたします。

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499
神奈川県立生命の星・地球博物館内
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195
加入者名 神奈川県植物誌調査会
年会費 2,000 円